

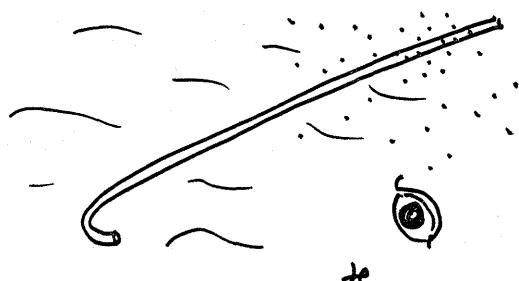
光るステッキ

文と絵 柴 岡 治 子

お父さんが、ステッキをシユツと海の水の中にふると、ステッキに銀のポツポツがいっぱいついて光ります。

くらーい海の上、そしてお母さん、弟、おばさんは、戸畠から若松への連絡船のデッキにいました。連絡船といつても、ボートよりはずっと大きいけれど、腰かけなんか少ししかなくて、ほとんどの人が立っていました。またデッキといつても、海の表面より少し高いくらいでしたから、デッキの上からステッキを海の中に入ることができたのです。

銀色に光るポツポツは、夜光虫だとお父さんは教えてくださいましたけれど、それが虫だと言うことはとっても不思議



九

で、暗い海の広がりの中で、ステッキが銀色に光るかざりをつけて走っているようで、とてもおばさんは楽しかったのです。ステッキについて光るだけでなく、波の音をぬつて連絡船が進むくらいの海の上にも、小さな光るポツポツがいっぽいやれ動き、ただよっていました。

多分日曜日に家中で、門司かどこかに遊びに行つた帰りだったのでしょうか。

船の上には子どもも大勢のつっていましたが、何となく静かで、船が海の水をかき分ける音と、夜光虫の光だけの世界に、おばさんはいるような気がしました。

そのうち、若松の桟橋が遠く明るくみえ、みんな目をしましたように、空気も人も動きはじめ、ゆらゆらゆれて少しこわい桟橋に下りて、家に帰りました。

何に乗つて帰ったのかな、多分電車だつたような気がします。